

トピックス

在宅こそが薬剤師の活躍の場

ファルメデイコ(大阪市) 薬剤師による在宅医療支援

強みは薬を飲んでから

ハザマ薬局を運営するファルメデイコ(大阪市、狭間研至社長は、医師の視点で薬剤師の強みを見出し、業界に先駆けて薬剤師による患者のバ



狭間研至社長

呼吸器外科医から薬局経営へ

もともと母が薬剤師で、薬局を経営していた。小学校から帰ると母がよく地域の人から健康や子育ての相談を受けていたのを覚えている。



ハザマ薬局平野センター かかりつけ薬局として地域での健康相談や施設、在宅訪問に取り組む

薬局を継いだ当時のハザマ薬局は、クリニックの隣にある完全

な門前薬局だった。すでに複数の店舗を展開していたが、その一つで協業していたクリニックの医師が急病で倒れた。その店舗は毎日1000人以上の患者が来ていたが、クリニックが閉院した途端ひたりと足を途絶えてしまった。「薬剤師には患者

たばかりで手術ばかりしていた。その後、研究のため大学院に進学したころ、実家の薬局から「お客さんの家族で、肺が真っ白な人がいる」と相談を受けた。当時勤めていた薬剤師に、その病気について説明したが、十分な理解が得られず「これは教えないといけない」と決意した。

月2回の勉強会を始めたところ、薬剤師から「免許を取ったのになんでまた勉強しないといけないのか」と不満の声が上がった。当時の薬剤師の業務は、医師の処方箋に沿って薬の数をそろえて患者に渡す計数調剤が中心で、せっかくながら薬学部で学んだ知識を十分に活かせていなかった。

個々の処方箋を例に挙げながら医師が処方するときの意図の解説や、薬歴の記載も一つ一つ指導した。大学院修了後、指導教授に相談し、留学をキャンセルして薬局を継いだ。

経済的な独立のため在宅へ



在宅薬剤師 中村史志さん 在宅では必ず患者さんの状態をチェックする

医師の訪問診療は月2回程度だが、薬局薬剤師は月4回訪問することができ、月に2回は薬剤師だけで患者宅に行くことになる。そこで状態を評価し、次の処方前までに医師にフィードバックする体制の構築に早くから取り組んだ。処方前

認知症を疑い、新しく薬を始めようとしたところ、同行していた薬剤師から、「先生、前回睡眠薬を増やしています」と指摘された。

一部の睡眠薬では量が増えたと高齢者で夜眠れなくなったり、幻覚が見えたりすることがある。それまでは、薬剤師に薬の量や何回に分けて飲むのかなど、モノとしての知識を聞いていた。しかし、薬剤師は「こんな人に、このような量を出していいのか」といった薬理的な視点を

持っている。薬学部では、薬の作用や、体の中の分布、飲みやすい形などについての知識をたくさん勉強する。薬学は、患者さんの体に薬が入った時や、そのあとの学問だ。薬剤師の強みは、患者が薬を飲んだ後から、医師から次の処方を受けるまでの間の患者の状態の評価や情報のフィードバックにあると気づいた。

「対人業務」へのシフトを進める

往診先の高齢患者で「最近、夜、男の人が3人やってくる」と訴える人がいた。幻覚が見えるタイプの

往診先で気づいた薬剤師の強み

「対人業務」へのシフトを進める

これまで取り組んできた地域医療と二体化した医薬協業の関係を「薬局3.0」と名付けた。このような取り組みを多くの人に広げたいと思い、薬局経営の支援や、業務効率化のためのシステム構築を目的に、PHDesignを立ち上げた。服薬支援・誤薬防止シ



服薬支援システム「nondi」 一包化した薬包のバーコードを読み取り誤薬を防ぐ

にこだわったのは、状態に合わせて薬の内容の変更がしやすいからだ。私は、薬剤師が人の身体に触れてはならないと言われていた頃から、聴診と血圧の測定を指導した。当初は反対の声も聞かれたが、今では薬学部の授業でも教えられる。

一方で、薬剤師の負担が大幅に増えてしまった。そこで業務的には重要だが、薬学的専門性はない仕事を薬剤師以外のスタッフを教育して担当してもらおう「薬局パートナー」という制度を作った。

そうした制度の流れに、内外から様々な意見があったが、今では、厚労省からの「0400通知」(ピッキングや一包化した薬剤の数量確認などは非薬剤師の補助を認める)もあり、広く受け入れられている。

患者さんの声を聞くことが長期的なリスク低減につながる

同薬局では、在宅訪問も積極的にを行う。処方内容を確認し、お薬カレンダーへの薬の配置、患者と家族への丁寧な聞き取りを行う。血圧の測定や、心臓や呼吸の音の聴診も欠かせない。「患者さんに時間をかけて向き合い情報をフィードバックすることで、かえって長期的な問題の発生を減らすことができる」と薬剤師の中村史志氏は語る。患者本人からも「薬のことを含めてなんでも相談できる」「皮膚のトラブルを抱えていたが、在宅の医師、薬剤師の先生に粘り強く対応して頂きすっかり良くなり感謝している」と喜びの声が聞かれた。

システム「nondi」や、電子薬歴システムを自社開発し、主に施設訪問の業務効率化に活用している。また、日本在宅薬学会を立ち上げ、在宅療養支援に関する知識や技能を備えた在宅支援認定薬剤師制度や、薬局パートナー検定試験を通して薬剤師の職能拡大や薬局の機能拡張を目指している。(談)